

今回の特集「いまどきのシューカツと女子学生」の座談会と企業訪問記について、お二人の方にコメントをお願いいたしました。

一生の仕事として

職業をもつことを考えて

いますか？

はまうずしんじ
 濱渦辰二さん(静岡大学人文学部教授)



企業訪問(6社)の結果を見ますと、

男女雇用機会均等法のおかげか、すべての企業で、産休・育休という基本的な制度は整えられているようで、なかには、復帰後も「時差出勤」や「勤務時間を1時間縮小できる制度」を導入しているところもあるようです。しかし、他方で気になるのは、そういう制度があるのに、「結婚で辞める人は減っています」が、出産を機に辞める人は「増えます」という傾向です。なかには、「地元採用が多いので家族や周囲のサポートがあり出産後も勤めることのできる人が多い」という企業もあります

が、逆に言えば、家族(特に夫)や周囲(特に夫婦どちらかの両親)のサポートがなければ、出産後に働き続けるのは困難ということでしょう。「男性にも育児休業制度はありますが、実際に利用した方はいません」というところを見ると、「夫は外で仕事、妻は家で家事・育児」という神話は、まだまだ健在ということでしょうか。

女子学生の座談会を読んで、男女共

同参考社会が謳われながら、採用試験でも現実には男女差別が隠されていることや、出産・育児のための制度はあることも、現実には「使にくい雰囲気がある」ことなど、現場からだと見えにくいことをよく捉えていると感じました。制度の点で言えば、「(子どもが)いきなり熱を出したら、うつされると大変なので、保育園もとつと帰す」というのは、私たちが保育園を利用してきたときも一番困ったことでしたが、まだまだ病児保育の施設が広がっていない現状(静岡県では伊東市と函南町に「つづつしかない)に行政からの援助があつていいと思います。他方、「お母さんで正社員というのは看護師や先生、あるいは公務員」という話は、一般の企業では、制度があつても、それを利用してきような社内の体制がまだまだ整っていないことのように思われます。たとえ制度が整つても、社内の体制がなければだめ、両方があつても、家庭でのサポートがなければだめ。前述の神話が生き残っている限り、女性が1人で頑

張りつてもなかなかうまく行かないわけですね。

しかし、ひるがえって、「余裕があるなら仕事に執着はしない」という発言や、「彼との給料格差がどれくらいだったら、相手に仕事を辞めて主夫になつてと言えますか」という問いの設定には、仕事をする女性の生き方についても考えさせられました。それがリアルな現実なのかもしれませんが、定年まで2つの会社に勤めるかどうかはともかく、「一生の仕事として何らかの職業をもつ」ということを考えてはいないように感じました。大学、就職、結婚という目の先のゴールのことは考えても、大学に入つてどうするのか、就職してどうするのか、結婚してどうするのか、という人生のプランのなかで自分の仕事をどう位置づけるか、なんてことは考えていないのですね。働く女性たちは、「好きで好きでしようがないことを職業として考えてみる(村上龍『13歳のハローワーク』)という気はないのでしょうか、疑問に思いました。いかがでしょうか？

左から、次女、長女、妻、本人(今年7月撮影)



自己紹介

27歳大学院生の時に、小学校教員として働いていた2歳年上の妻と、福岡で結婚。38歳で現職に就くまで11年間、大学院修了後は非常勤や助手をしながらも、主に妻の収入で言わば「ひも(主夫?)」生活を送る。31歳からドイツ留学をした2年間、福岡に残った妻は2〜3歳の長女と二人で暮らしたが、その「お返し」と言うべきか、静岡に職を得た私は、教員採用試験を受け直すために受験勉強をする妻と長女を福岡に残し、2〜3歳の次女と2年間二人で暮らした。静岡でやつと家族4人で暮らし始めて、早や11年。妻は教員を続けている。長女は、今年4月から、作業療法士として名古屋で病院勤務を始めた。

自己紹介

名古屋市出身。国立音楽大学音楽科卒。国内をはじめ、ベトナム、南アフリカ、ニカラグア、アイルランド等訪問し、世界各地の歌を日本に紹介してきた。ホールコンサートのみならず、「葉書、公害、差別」などの現場にでかけ、音楽家として「歌を必要とする人のもとに歌を届ける」活動を展開し、すでに100万人近い人々の前で歌い続けてきた。また、歌の世界は幅広く、女性・母親の視点で社会を直視し、人生の途上で出会ったさまざまな出来事を歌にしている。98年、文化庁芸術家在外研修員としてアイルランドのリマリック大学に留学。以後、毎年夏、アイルランドにてコンサート。04年、歌手生活35周年を迎え、ベトナム公演をふくむ記念コンサートを各地で開催。CD「アイルランドの風に吹かれて」[NIVA KUMIKO]など多数。著書「歌って愛して」「ただの私に戻る旅」「ゆるゆるふっくら」など。



2004.3.21.日比谷

「私が私らしく生きる道」は自分次第

よこいくみこ
横井久美子さん(シンガーソングライター)

「座談会 しゅかり見ました カイシャのいろいろ」を読ませていただいて、若い世代の方々が、「働く」ことに対し、果敢に社会と向きあっている姿が鮮明に伝わってきました。会社を訪問し、面接を受け、インターシップに参加された女性たちの率直でいきいきした発言から、現代の社会がかかえる「カイシャのいろいろ」が私たちにも見えてきました。「出産や育児のための制度」から、「男にもそれなりに悩みはある?」ことま

で、「男女共同参画基本理念」(男女の差別をなくし、「男」「女」である以前にひとりの人間として能力を発揮できる機会を確保していく)に沿い、女性ばかりでなく、男性へのまなざしも感じた座談会でした。

私が特に印象に残ったのは、「仕事をとる?カレシをとる?」のところ。二人の子どもを育てながら35年間仕事として歌をうたってきた私にも、面白く、また考えさせられました。

「子どもを産んで幸せな家庭を築きたい」という気持ちは、みんなあると思うんですよ」「子どものせいで仕事をやめたくない。自分自身の生き方として仕事を続けたい」「主婦の仕事も大切ですが、自分がどこまで成長しているか見たい。だから出産しても仕事を続けたい」「(金銭的)余裕があるなら仕事に執着しない」「私は一番お母さんといいたい時にお母さんが働いていたから、逆に「一緒にいたい」などなど。

私も、いっぱい同じ思いをしてきました。子どももほど、何にもまして生きる喜びをあたえてくれる存在はありません。私は、子どもが生まれた時、その

新しい命の「感動」から、歌を続けるならこの「感動」以上の仕事をし、子どもに報いたいと思いました。

日本は先進国のなかでも、女性の国会議員、職場での管理職などが少なく、女性の社会進出は遅れています。女性の平均給与額も、男性の給与額に対し66.5%(02年)で、スウェーデン84%、フィリピン84.5%、82.1%イギリス、アメリカ76.5%など比べ、男女間格差が大きいのです。

働くか働かないか、子どもを産んでも続けるべきか否かという個人の選択の前に、まだまだこうした社会の壁が立ちほだかっているのが現状です。

しかし、その壁も、打ち破ろうとする人には、打ち破れるのです。女性が選挙権もなかった時代からたくさんの女性たちが壁をコツコツたたき、壁を打ち破り、一歩一歩道を切り開いてきました。そして、21世紀に生きる若い皆さんの前には、「私が私らしく生きる」道が、その強い意志と努力を惜しまないならば、開かれているのです。壁を打ち破ろうとするみなさんに、心からエールを送ります。



発足から一年

「しずおか男女共同参画推進会議」
自主的な取組をめざして『取組宣言』を採択

男女共同参画社会の実現に向けて、家庭・地域、学校、職場などあらゆる分野における男女共同参画の自主的な取組を図ることを目的に、昨年度、58の民間団体を構成員とするネットワーク組織「しずおか男女共同参画推進会議」が設立され、この8月で二年を迎えました。

この二年間の取組

この二年間、地域・家庭部会、教育部会、産業部会では、合同部会も併せて三回の部会を開催しました。この中で、男女共同参画の課題や自主的な取組についてのヒントを掴むため推進方策についての情報交換を重ねてきました。

● 部会の取組

- ◎ 先進取組事例の研究
- ・自治会ぐるみでの取組
- ・学校での男女共同参画教育の取組
- ・企業での女性の活用
- ・高齢男性の意識改革
- ◎ 意見交換

これまでの部会で出された主な意見

地域家庭部会

- 若者の固定的役割分担意識は薄らいでいるが、年輩者では根強く残り、世代間での意識の差が大きい
- 男性は仕事に追われる中で、仕事以外での生活の場を失っている人が多い
- リーダーシップを発揮して町内会長、自治会長などで活躍する女性は少ない

教育部会

- 男女共同参画教育は教師個人の裁量に負うところが大きく、学校全体の取組とはなっていない
- 子育てや子どもの教育は母親が主に担っている
- 教師の意識や発言が子どもに与える影響は大きい

産業部会

- 働く女性の家事負担が大きく、職業人として存分に能力を発揮することが難しい
- 企業が行う子育て支援には限界があり、行政の支援が不可欠である
- 退職した女性が再就職して、それまで培った技能や経験を生かす機会が少ない

● 自主的な取組

- ◎ 7団体で実施
- ・職場における男女役割分担についての調査
- ・男女共に活躍できる職場づくり等の研修会

これからの行動に
向けての取組宣言

8月24日に開催された全体会には、50団体の代表者が出席し、木村尚三郎会長(静岡文化芸術大学学長)及び石川嘉延名誉会長(静岡県知事)から力強いメッセージをいただきました。

また、これまでの事業報告及び今後一年間の事業計画が承認されました。各部会を代表して夏目智子静岡県男女共同参画センター交流会議代表、犬塚協太県立大学国際関係学部助教授、山口正藏静岡県S O H O 振興協議会運営委員長が

ら、これまでの部会の取組の中から出された主な意見を紹介していただきとともに、これからの二年間、具体的な行動に向けての《取組宣言》が提案され、全会一致で採択されました。



トッピングセミナーの開催

また、男女共同参画推進の旗振り役として期待されるリーダーに男女共同参画についての理解を深めていただくことを目的に《トッピングセミナー》

が開催されました。講師の坂東眞理子共同参画研究所所長(前内閣府男女共同参画局長)からは、「今なぜ男女共同参画か―少子高齢社会への対応―」をテーマに講演をいただきました。諸外国の取組を紹介いただきましたながら、これまで女性を人材として育てる環境が少なかった日本の社会の中で、女性をリーダーとして育てることや男性もプレッシャーから解放されてのびのびとチャレンジできるよ

取組の促進を期待

今後は、この宣言を踏まえ、各部署において、次の取組のヒントを参考にしながら団体・事業所での自主的な取組が一層促進されるものと期待されます。

●地域・家庭分野の取組のヒント

- ・家庭での家事や育児、介護など役割分担の話し合い
- ・地域での性別、年齢を超えた交流の場の提供
- ・数値目標の設定(自治会、老人クラブでの女性役員の登用率)

- 教育部会の取組のヒント
- ・授業参観会などへの父親の参加機会の増加
- ・県で作成した啓発副読本の活用

●産業部会の取組のヒント

- ・数値目標の設定(管理職への女性の登用率、育児休業取得率等)
- ・働く女性の相談窓口の設置(仕事と家庭の両立とキャリアアップなど)

県の支援を強化

県では、推進会議の自主的な活動を積極的に支援していくため、加入団体が男女共同参画に関する研修会・講演会等への講師派遣やビデオ提供などに加え、本年5月からは団体のリーダーの方々に、先進的な取組や国をはじめとする関係機関の最新情報をタイムリーに提供するメールマガジン「ハーモニック・レター」を月二回配信しています。

また、今後は企業や団体、個人等の先進的な取組を紹介するための事例集を発行(1月予定)する予定です。

採択されたこの1年間の取組宣言

地域・家庭部会

◎さまざまな価値観を持つ人々が共に暮らす家庭や地域社会の中で、一人ひとりが家族や地域社会の一員として、仕事と生活のバランスを図りながら、いきいきと活躍するため、伝統文化や新しいライフスタイルなど多様な考え方や生き方を認め合ひましょう。

教育部会

◎次代を担う子どもたちが、一人ひとりの良いところや違いを認め合ひ、お互いがかげがえのない存在であることに気付くとともに、自分らしくを大切に個性や能力を発揮しようとする気持ちを育むため、家庭や地域、学校で男女共同参画についての教育や学習の充実努めましょう。

産業部会

◎職場において、誰もが年齢や性別にかかわらず、個性や能力を発揮し、対等な立場でいきいきと活躍でき、また、仕事と生活のバランスのとれた暮らしを実現するため、一人ひとりの意識改革を進めるとともに、社会全体で仕事と家庭の両立ができる環境整備を進めていきましょう。

Voice 読者の声

44号「こども未来絵～それぞれが自分色に輝くために～」を読んで

初めての育児に奮闘する毎日です。先日図書館でこの本を見つけ、読んでみたところ、心が落ち着いてほっとする反面、なるほどと勉強にもなりました。素敵な本に出会えてよかったなと思いました。
(浜松市 ママルーキーさん)



一才になる子を育てています。「赤ちゃんて不思議!」とびっくりしたり、「人間てすごい」と感動したり、「育児」は「育自」と実感しています。「鈴木まもる」さんの子育て絵日記、どーしても見たくて図書館にリクエストしちゃいました。「ねっとわあく」を読むと「私もがんばろう!」と刺激を受けます。これからも、一読者として応援していきます!! (新居町 むむさん)

思春期のころ「赤毛のアン」を読み、勇気づけられました。「こども未来絵」の中の児童文学作家草谷桂子さんの男女の枠にこだわらず、自分らしく生きることを伝えるため、三冊の絵本を出版されたとか。本を通して自ら学び、考え、思いやりのある子どもに育ってくれることと思います。
(静岡市 長田恵子さん)

45号のご感想をお寄せください。



or



E-mail、FAXどちらでも結構です。抽選で美術館招待券などを差し上げます。

E-mail kouryuukaigi@ka.tnc.ne.jp

FAX 054-251-5085

編集後記

編集スタッフ

河合 登代子(編集長)

川口 智子

原崎 小百合

伊藤 愛

榊原 利奈

高岡 基(アドバイザー)

45号の編集にあたり、編集員の中に就職活動真っ只中の女子学生2名、つまり私たちがいたこともあって、今まであまり取り上げてこなかった「女子学生の就職活動」にスポットを当てることとなりました。

実態というものは、実際に就職活動しないとわからないことも多く、ほかの編集員も驚くことが多々あり、私たちがなりに「いまどきのシューカツ」について、掘り下げるのができたと思います。

ご協力いただいた企業の皆様、学生のみなさん、コメントをいただいたお二人の方たち、ありがとうございます。

最後に、今回のねっとわあくをお手にとってくださった方に、今の女子学生たちをとりまく厳しい状況を、少しでも感じていただけたら幸いです。

(伊藤・榊原)



ねっとわあく vol.45

監修・発行／静岡県男女共同参画センター

発行／平成16年10月1日

編集／静岡県男女共同参画センター交流会議

住所／〒422-8063 静岡市馬淵1丁目17-1

TEL／054-250-8107 FAX／054-255-9266

